

# 蛍草

松岡隆子

笹 叢 の 雨 音 二 百 十 日 過 ぐ  
秋 澄 む と ガ ラ ス 囲 ひ の 森 の カ フ エ  
初 秋 の 雨 の 白 さ の 鎖 樋  
秋 蝶 の 森 の ベ ン チ は 一 人 づ つ  
コ ス モ ス に 語 れ ば た れ も か も 少 女  
初 萩 の 吹 か れ て 彩 を 零 し け り  
と ほ く 見 て 仙 人 草 の 秋 の 風

どこをどう歩いてきても蛍草  
鎌倉のこたびも秋の高きかな  
露草の瑠璃深ければ供華に足す  
暮れぎはの水の匂へる虫の秋  
かなかなの声の中なる歩幅かな

朝は曇りがちだった空が鎌倉に着いた時は見事な眸晴れとなった。先生の墓所は霊園の丘の上にある。墓所へ続く高い階段をみんなで上った。墓石の僅かな埃を拭い水をかけて清め、線香を手向けて手を合わせた。背山の裾に露草が咲いているはずだというので行ってみた。ひときわ澄んだ藍色の露草を手折って供華に添えた。線香が燃え尽きても誰も立ち去ろうとしない。つくつく法師がしきりに鳴き秋茜や秋蝶の飛ぶ中、それぞれ句帳を手は何時までも佇んでいた。何処からか先生の声が聞こえたような気がした。